

# T・パーソンズの社会変動論と近代論

千 石 好 郎

## はじめに：パーソンズ理論への関心の転換

新しい社会運動が先進諸社会を席捲していらい、パーソンズ社会理論は、急速に「通常科学」に近い地位を喪失していった。その傾向は、パーソンズが1979年に死去して以来、さらに拍車がかかっているようである。現在の日本の社会学界では、さらにその度合いが大きく、最近でも、「遅れてきたパーソニアン」を自認する熊坂賢次氏が「パーソンズとモダンのリアリティ」を書いて、「パーソンズの死」を宣告する始末であり、<sup>1)</sup>少数のパーソンズ研究者たちによって地味な研究が細々と続いているに過ぎない。1960年代から70年代初頭にかけてあれほどパーソニアンが多かったのを想起すれば、まさに今昔の感がある。

けれども、目を海外に転じれば、必ずしもそうではない。フランクフルト学派の第2世代のハーバーマスが『コミュニケーション的行為の理論』において、パーソンズから批判的であれ多くの摂取を行っているばかりではない。アメリカでは、「ネオ・機能主義」として一括される理論社会学の新しい動向がある。これは、もちろん、アレグザンダー (Jeffrey Alexander) を中心とする運動で、彼の編になる同名の本が、1985年に出た。また、アレグザンダーは、「ドイツにおけるパーソンズの復活」のなかで、一方では、Critical Parsonsとしてハーバーマスを、German Parsonsとしてルーマンやミュンヒを挙げている。このように着実にパーソンズの再評価は進行している。

ところが、最近、パーソンズ復活の新しい中心的テーマとして、近代論が浮上してきた。この近代論の文脈では、パーソンズ理論への関心は、むしろ高まっ

ているのである。その代表的な著作は、ロバートソンとターナー (Robertson, R. & Turner, B.) 編の『近代性の構造：パーソンズの射程』(1991)<sup>2)</sup>である。日本でも、最近、小原昌氏が「T・パーソンズと〈モダニティ〉」を書いている<sup>3)</sup>。先の熊坂氏は「誰がパーソンズを殺したのか。それは、モダンのリアリティである」として、「パーソンズの悲劇は、その回答がでた70年代に、モダンの社会がアメリカ社会ではすでに過去のシステムとして、価値としても制度としてもまた欲求としても、否定される方向性に確実に進行していったことである」<sup>4)</sup>と論じた。これに対して、小原氏は、「ポスト・モダンがいわれている今日、パーソンズが示した近代性は、ゆらいでいるのだろうか。近代の終焉としてよりは、まだ近代化のプロセスにあると考えられるのではなからうか」<sup>5)</sup>としている。私としては、熊坂氏の「パーソンズの死」宣告には一面の真理が存在していると考え。しかしながら、他面では、小原氏の「パーソンズ近代論生き残り説」にも、うなづけるものがあると思う。この両義的な直観を直観のレベルに止めること無く、社会理論として明確に了解することをめざして、パーソンズの世界変動論の概要を探り、その上に彼の近代論を浮き彫りにするという手順で、検討することにしたい。

## 第1節 パーソンズ社会変動論の展開

### (a) 『社会システム論』(1951)における社会変動論

パーソンズは、その長い研究生活のなかで、さまざまな批判を受けてきた。その批判のなかで最も重要な論点の一つが、パーソンズ学説は、社会の安定や均衡の理論であって、社会変動、闘争の側面が弱いというものである。

そこで、パーソンズ社会変動論の推移を振り返ることから始めよう。

パーソンズは、明示的に社会変動を論じたのは、彼の第2期の代表作である『社会システム論』(1951)のなかの第11章「社会システムの変動過程」においてである。

パーソンズは、まず、この章の冒頭で「社会システムの中の過程」と「社会

システムの変動の過程」とを明確に区別することが必要であるとする<sup>6)</sup>。そして、この章の末尾では、良い理論を「変動の問題と安定したシステムの中の過程の問題との双方に等しく適用できるものでなければならない<sup>7)</sup>」と主張する。要するに、社会変動の社会システムとその環境との関係についての統一した理論が、パーソンズにとって求められていたのである。

しかしながら、パーソンズは、彼の考察からの必然的推論によって「社会システムの変動の諸過程についての一般理論は、現在の知識の状態では、不可能である」と断定する。その理由を、「かかる理論がこのシステムの過程に関する法則についての完全な知識を含意しているであろうが、われわれはこうした知識を所有していない」とする。彼の『社会システム論』は、「そのようなシステムの中の変動の特殊な副次過程の理論である」に過ぎず、「システムとしてのシステムの変動の全般的過程の理論ではない<sup>8)</sup>」ところに求めている。

#### (b) 富永健一氏の社会変動論におけるパーソンズ理論の位置づけ

社会変動論が専門の富永健一氏が、最近、氏の学説を集大成する著書『行為と社会システムの理論：構造—機能—変動理論をめざして』(1995)を刊行された。そのなかで、氏は、パーソンズの社会変動論の意義と限界について論じている。本稿のテーマに密接に関連しているので、言及することにしよう。氏の明快な立論は、以下の通りである。

氏は、社会システム理論の発達史を以下の4段階に区分する<sup>9)</sup> (P.95)。

- (1) 機能分析のモデル
- (2) 相互依存のモデル
- (3) システム—環境分析のモデル
- (4) システム変動分析のモデル

パーソンズの社会システム理論は、以上のうち、第1種の社会システム・モデル(機能分析のモデル)と第3種の社会システム・モデル(システム—環境のモデル)との両面をもっていたと富永氏は解釈する。機能分析のモデルは、

スペンサーからデュルケームを経てラドクリフ・ブラウンにいたるもので、第2種の相互依存のモデルとともに、社会システムを「閉じたもの」として扱っていた。ところが、パーソンズは、「システム—環境のモデルとしての側面は、サイバネティクスと一般システム理論に発するものであり、パーソンズ理論の形成は……それらに先立っていたので、パーソンズはこれをキャノンのホメオスタシス原理から導入した」<sup>10)</sup>にもかかわらず、「パーソンズがホメオスタシス原理を社会システムに適用することに着眼したことの意義は、パーソンズ以前の社会学において行われていた第1種と第2種 of 社会システム・モデルが閉じたシステムであったのに対して、環境に対して開かれたシステム・モデル、すなわちここでわれわれが第3種のシステム・モデルとして位置づけた〈システム—環境のモデル〉を社会学にはじめて導入することを可能にした」<sup>11)</sup>という。しかしながら、ホメオスタシス原理に囚われていたので、「ホメオスタシス・テーゼは、本来的に構造変動のないシステムについて構築された理論である」が故に、「結果として、社会システムが構造変動にいたる過程を理論化することを断念せざるをえないという、大きな代償を支払わねばならなかった」のであると言う。先に紹介した『社会システム論』(1951)における「社会システムの変動の諸過程についての一般理論は、現在の知識の状態では、不可能である」というパーソンズの断定の背景には、このような学説史上の経緯があったのである。

富永氏は、さらに1970年代に社会システム論におけるパラダイム変換が生じて、自己組織性の理論やオートポイエシスの理論など、要するに「ファースト・オーダー・サイバネティクスとセカンド・オーダー・サイバネティクスの交代の時期」があったとし、その観点からするならば、「1979年のパーソンズの死は、社会学においてもまたファースト・オーダー・サイバネティクスの時代が終結したことを象徴する出来事であったといえよう。これにともなって、パーソンズの次の世代の社会システム理論は、この新しいサイバネティクスを摂取して、新しいページを開くという課題を背負うことになった」<sup>12)</sup> こうして、パーソンズ理論は「社会システム・モデルの変遷の歴史の中で、依然としてキイ・ステッ

プの一つとして位置づけられねばならない」けれども、「以上のようなパラダイム変換の中で、現在ではすでに超えられた」<sup>13)</sup>と結論している。

この富永氏のパーソンズ学説の位置づけは、正しいのであろうか。この問題の検討は一つの宿題として保留し、われわれは、パーソンズの後期の著作である『社会類型—進化と比較』(1971)と『近代諸社会の体系』(1977)の世界に入っていくことにしよう。

### (c) 近代論としてのパーソンズ理論の意義

富永氏のパーソンズ理論限界説は、あくまでも科学史の枠組の中からの立論であるが、学説は、社会の中に存在するものであるもので、その視角からの評価があつてしかるべきであろう。そこで注目されるのが、ロバートソンとターナー(Robertson, R. & Turner, B.)の『近代性の構造：パーソンズの射程』(1991)である。

彼らは「Parsons を如何に読むか」において、理論を第一次の理論と第二次の理論とに分ける。

第一次の理論とは、現実の「社会過程や社会構造を理解しようとする試み」のことであり、第二次の理論とは、「既存の理論を反省する社会学の諸分野を理解する」試みである。

従来、パーソンズ理論は、処女作である『社会的行為の構造』のような、パーソンズ自身の第二次の理論が先ずは注目され、または『社会システム』あるいは『行為の一般理論を目指して』のような、パーソンズ自身が自らを治療不能の理論家であるという告白に引きづられて、一般理論家という評価が高かったのでは、なかろうか。

しかし、ロバートソンとターナーは、パーソンズの仕事は、「社会学理論への主要な貢献」ではあるが、しかし、「その主要な狙いは、社会の分析に貢献するよりも、社会学を生きた知的学問として確立すること」すなわち、「その主要な研究が近代諸社会のシステムのなかでのアメリカ的民主主義の社会学」にあつ

たし、したがって、主要に「第一次の社会学者」と主張する。

その際、パーソンズの主要な関心は「先進社会システムとしてのアメリカの理解を発展させること」にあり、そうすれば、特殊な関心は、むしろ、パーソンズの政治社会学に、そして諸社会の世界システム観を追跡しようと試みる彼の仕事の側面に、与えられなければならない」ということになる。したがって、「分析的複雑さや様式的困難さ」を伴っている『社会的行為の構造』、『社会システム』あるいは『行為の一般理論を目指して』よりもむしろ、パーソンズの初期のファシズムに関する論文、アメリカ的システムにおける緊張を分析する諸論文、専門職化に関する仕事、そして病人の役割についての彼の研究に注目すべきであると主張する。この問題関心からすれば、パーソンズ解読には、『諸社会：進化論的かつ比較的視座』（1966）や『近代社会の体系』（1971）に「ある特殊な場所が与えられる」べきであるとする。「それらはまた、アメリカがその焦点である、近代諸社会のシステムを識別することである、パーソンズの全体としての社会学的企図にとって中心的でもある。われわれがアメリカの価値体系についてのパーソンズの概略を包含するのは、就中、この理由のためである」<sup>14)</sup>という。このような視角からパーソンズを眺めれば、価値と科学とを明確に実践的に結合させるという市民社会の一員として民主主義の前進にコミットするパーソンズ像が、浮上することになるろう。

#### (d) パーソンズにおける社会進化論の導入

パーソンズは、1964年の論文「社会における進化的普遍素」において、生物システムの進化と社会システムの進化との差異と連続性を解明する。そして次のように、指摘している。「人間は、彼の有機体としての生来の才能から、そして一般化された学習にたいする能力やそれへの究極的依存から、文化を創造し、伝達するユニークな能力を引き出している。生物学者アルフレッド・エマソンから引用すれば、人間の適応の主要な領域のなかで、「遺伝子」が「象徴」によって置き換えられた。それゆえ、環境に取り組む「要求」を決定するのは、ただ



成的な象徴体系（すなわち、宗教的な構成要素）を通じて知覚される「究極的実在」と呼んだ環境に挟まれて、行為体系が機能していることを示している<sup>17)</sup>

V欄は、パーソンズがサイバネティクス理論を自らの行為体系理論に導入した成果が現れている。パーソンズ自身の説明では、「V欄は、諸要因がこれらの体系に対しておよぼす影響の二つの方向を示している。上向きの矢印は、条件のハイラーキーを示しており、そのハイラーキーを上昇していくと、普通の表現を使えば、「必要ではあるが十分ではない」条件がだんだんと高くなっていく。下向きの矢印は、サイバネティクスの意味で制御要因のハイラーキーをあらわしている。下向するにつれ、パターンやプログラムの実行を可能にする、よりいっそう多くの必要条件の制御が行われなければならない。上方の体系は、相対的に情報度が高く、下方の体系は、相対的にエネルギー度が高い<sup>18)</sup>という。

なお、パーソンズは、晩期の“Action Theory & The Human Condition” (1978)において、「究極的実在」を「目的体系 (telic system)」に改めた。そして、このなかの行動有機体を「行動体系」と「人間的有機体系」とに分節し、「自然的—有機的環境」を「人間的有機体系」と「物理的—化学体系」とに分節した。そうして、第2図のように、「人間的条件のパラダイム」をAGIL図式であらわし、壮大な学問的構想を描いたのである<sup>19)</sup>

第2図 人間的条件のパラダイム

A			G
	物理的—化学的体系	人間的有機体系	
	目的体系	行為体系	
L			I

(f) 『近代諸社会の体系』(1977)における「社会」とその下位体系の進化

『社会類型—進化と比較』の姉妹編である『近代諸社会の体系』では、パーソンズは、社会 (society) を、「他の社会諸システムを含みながら、その環境との関係で、最高水準の自足性によって特徴づけられる社会システムの類型」と定義



する。そして、この定義にある「全面的自足性」に注釈を加えながら、これは、「行為の下位体系である社会の地位と両立しない」として、「いかなる社会も、一つのシステムとして維持させてゆくために、当の社会の環境をなす諸体系との相互交換によって受け取る「入力(input)」に、依存している。とすれば、この場合にいう、環境との関係における自足とは、相互交換関係の安定性や社会的機能化のために相互交換を規制してゆける能力を、意味することになる<sup>20)</sup>」としている。その上で、「社会システムにおける発展的変動の過程のさまざまな様相について、関連する分類」を試みる。それは、第3図で示されている。

第3図 社会の発展的変動過程の諸様相<sup>21)</sup>

下位体系	構造的 構成要素	発展過程の 諸様相	主要な機能
社会的共同体	規範	包括〔統合〕	統合
形相維持もしくは価値の共通委託	価値	価値の普遍化	形相維持
政治	集合体	機能分化 〔専門分化〕	目的達成
経済	役割	適応能力の向上	適応

### (g) 社会の歴史的進化段階

さて、パーソンズは、以上の手順を踏まえて、社会の歴史的進化段階を提示する。その内容を素描すれば、以下の通りである。

まず、最も基本的な命題は、「社会—文化的進化は、有機体の進化と同じように、変異と分化を通じて、単純なものから徐々に複雑な形態へと進行する<sup>22)</sup>」ということである。

この書において、パーソンズは、社会の発展段階を、「原始社会」、「中間社会」（古代社会、「歴史的」中間帝国、二つの「苗床」社会）、「近代社会」の3段階に区分している。そして、社会変動を、「私（パーソンズ）が〈漸次的〉行為進化の過程という単一の局面と呼ぶパラダイム」によって説明しようとする。こ

の「〈漸次的〉によって意味されるのは、全面的な社会進歩ではなくて、まずは当該システムの、環境との関連における適応能力の実質的増大という結果をもたらす変動の過程」<sup>23)</sup>なのである。

そして、各社会段階には、「進化的普遍的要素」(evolutionary universals)が存在している。パーソンズは、「社会における進化的普遍要素」(1964)において、進化的普遍要素として、「ただ一回だけ出現するというよりもむしろ、異なる諸条件のもとに作動するさまざまな体系によって〈偶然発見され〉やすい進化を助長するのに十分重要ななんらかの組織的発達」<sup>24)</sup>として指示した。その定義は、「その発達がある種の生活システムの長期的な適応能力をきわめて増大させるために、その複合体を発達させる諸システムだけが一定のより高い水準の適応能力に到達できるところの諸構造とそれに結びついた諸過程の複合体」<sup>25)</sup>である。

ここで、1974年の論文「社会学における〈構造的機能的〉理論の現在の地位」において、述べられた「構造・機能主義」の修正意見について紹介しておこう。

パーソンズは、「そもそも〈構造〉と〈機能〉という二つの概念が同等なものではない」として、「連字符で結ばれた〈構造・機能主義〉というレッテルは、ますます不適切になってきている」<sup>26)</sup>とする。そして、①「構造を実体化して考えるのは、本意ではない」こと、②「構造と過程とは相関的な概念である」を踏まえて、「構造」とは、「経験的な基盤から、特定の認識的企図にとって意義ある期間にわたってまたそのような一組の条件下で、安定的と仮定されうるか、あるいはそうであることが示される生体系の諸部分間の何らかの一組の関係」なのであるとし、また「過程」とは、「体系の状態あるいは体系の該当する部分ないし諸部分が、心に抱く特定の認識目的にとってふさわしく、また有意義である時間範囲内で変化してゆく諸側面を指定するもの」<sup>27)</sup>であると規定する。

このようなパーソンズの新しい認識を踏まえて、「進化的普遍要素」と「適応能力の上昇」を解釈すれば、彼の社会進化論は、この「構造」と「過程」の両者を組み込んでいるものであることは明らかである。彼のいう「構造」は、社

会階層、文化的正当性、官僚制組織、貨幣および市場、一般化された普遍的規範、そして民主的アソシエーションである。構造とは、実際には6個の進化的普遍要素のことである。そして、「過程」とは、分化、適応的上昇、包摂、価値一般化なのである。

これらの作用によって進化の度合いの低い社会類型から高い社会類型への移行（「突破 (breakthrough)」）が行われる。すなわち、原始社会から中間社会へ「適応的上昇」する際に求められる「普遍的進化的要素」は、社会階層と文化的正当性である（後者は、世界宗教やギリシャ哲学がBC 4世紀ごろに一斉に登場したことをパーソンズは指摘している）。そして、中間社会から近代社会への移行には、残された「普遍的進化的要素」の創発が認められるのであるが、ついに登場した「近代社会」の誕生については、節を改めて、見ていくことにする。

## 第2節 パーソンズの近代論

レックナー (Frank J. Lechner) は、「パーソンズと近代：ある解釈」において、これまでさまざまなパーソンズ解釈があったが、最近有力になりつつある「今現れつつあるパーソンズ解読」は、「パーソンズを特殊な社会と文明の性質と発展を解釈するために、近代性のモデルの定式化に取り組んだ分析的構成主義者として解読することができる」<sup>28)</sup>としている。

では、パーソンズ自身は、近代社会をどのように理解しているのだろうか？

### (a) 構造的分化としての近代

まず、パーソンズが歴史的に近代社会をどのように把握していたのかを、押さえておこう。『アメリカの大学』(1975)では、「近代社会と考えられているものが出現したのは、17世紀のことで、諸社会のヨーロッパ的システムの北西部、すなわちイギリス、オランダ、フランスにおいてである。引き続いて起こった近代社会の発展には、三つの革命的な構造的変化の過程が含まれている。その

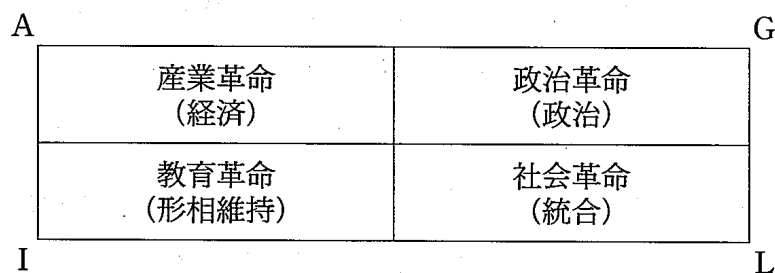
三つとは、産業革命、民主主義革命、教育革命のことである。三つは、随伴した政治的暴力を一様に含むものではなかった<sup>29)</sup>と述べられている。

ここで注目すべきことは、『近代社会の体系』(1971)で述べられているように、パーソンズが、近代を初期近代と成熟した近代とに分けていることである。すなわち、18世紀後半から19世紀前半にヨーロッパで始まった産業革命と民主主義革命という「二つの革命が、初期近代を形成した」のである。産業革命は、「経済と政治を分化させ、そして、その両者の間に新しい結びつきを発展させた」し、また、「民主主義革命は、政治と社会的共同体の間に同様な変化をもたらした」のである。

これに対して、パーソンズは、「教育革命こそ、社会的共同体と形相維持システム、…ならびに、それを通じて文化システムとの間に、同様な変化(構造分化)が起こり、その変化の頂点として発生したものである」と主張する<sup>30)</sup>

パーソンズの基礎理論にある AGIL 図式で、表示しておこう。パーソンズは、「近代社会のほとんどあらゆる主要な制度的部門を、今や有名ではあるが多々悪評を買った AGIL システムのなかで、分析しようと試みてきた。この広い枠組みのなかで、パーソンズは家族、親族システム、愛、経済交換、企業家、政治システム、社会統合の文化的諸側面についての著述を行った」<sup>31)</sup> 私は、これまで、近代社会の基本的構造を、ヘーゲル—マルクスの近代社会論に依拠して、家族—市民社会—政治的国家の二重の分離として把握してきたが<sup>32)</sup>このような理解は、ここでパーソンズが立論しているものと、同じものであることは、興味深い。

第4図



教育革命は、ただ単に「直接に宗教に基づかない社会的共同体」という「世俗化の流れをもう一步進めたもの」であったばかりではなくて、「成層体系に新しい成員を配置すると同時に、社会的共同体の十分な成員性の基準として、社会化のための能力への強調の増大を反映している」ものでもある。

教育革命は、成熟した近代という「新段階の焦点となるもの」であった。

それは、初期近代の二つの革命「産業革命のテーマと民主革命のテーマ、すなわち機会の均等と市民権における平等の両理念を統合するもの」<sup>33)</sup>であった。

すなわち、「才能にしたがって、それぞれに適切な地位への階層づけが、社会化の過程の複雑な各階梯を通じて調節されてくると考えられる」ようになってくるし、まさに教育革命は、「社会の職業構成のうえに、特に全般的に、人々の社会的地位を引き上げる方向にむかって、深い、かつ増大する影響力を発揮している。いわゆる「専門的職業」の重要性の増加はいちじるしい」<sup>34)</sup>

こうして、成熟した近代の革命としての教育革命の重要性が浮き彫りにされる。

しかし、パーソンズは「第6章 新しい指導国家と現代社会における近代性」の結論では、「今日の状況において、緊張と闘争そしてまた創造的な改革について特に目立つ焦点」は、「資本主義と社会主義をめぐる19世紀的論争に見られたような、主として経済にもとづくものではない」し、また「政治にかかわる争いも今日もまだ続いてはいるが、さりとて、それが権力の配分をめぐる「当否」の問題であるかぎり、それらを主として政治的観点ばかりから扱うのは間違いである」。さらに、「特に教育革命の後では、文化上の改革目標は、ほぼ達成に近づいているといえよう」<sup>35)</sup>という。

そして、今後の課題は、「社会的共同体そのもの」にあると主張する。

「社会を統合してゆく制度とみなされる、この新しい社会的共同体」こそは、「われわれの知的伝統において、周知の水準から判断できない異なった水準で運営される必要がある」とする。換言すれば、「この新しい社会的共同体は、政

治権力や富の支配力を乗り越えてゆかねばならないし、また、こういう政治権力や富を価値的信念や権力的影響力にまで一般化させてゆく諸要因に、負けずに進んでゆかねばならない<sup>36)</sup>というのである。マルクスの政治的解放から人間的解放への視点を、パーソンズ的に表現したものであると解釈しても、あながち誤りではないのではなかろうか？ しかし、極めて困難な課題であることは、大方が承認するものであろう。社会科学の英知は、今後、この課題に取り組んで行くことに、相違あるまい。

### (b) 専門職論

前項で、近代が「構造的分化」としての特徴を持ち、それを教育革命が支えているとすれば、現代の職業が構造的分化に見合って、専門職化していくのは見やすい道理である。医者をはじめとする医療従事者、弁護士、教師、福祉従事者などを、想定すれば明白である。

パーソンズは、専門職を論じた「医療社会学の領域に関連する若干の理論的考察」(1937)<sup>37)</sup>において、「近代産業社会全体をセルフ・インタレストによって特徴づけ」<sup>38)</sup>ているマルクス理論とテンニース理論では説明のつかない「ディスインタレスティッドネス」(無私無欲)によって特徴づけられる医療の専門職を分析することを試みた。とりわけ、「ディスインタレスティッドネス」を解明するために、テンニースの『ゲマイシャフトとゲゼルシャフト』の区別から「パターン変数」が導き出されたものである。完成された「パターン変数」で専門職を特徴づければ、「集合体中心的志向」、「感情中立性」、「限定性」、「普遍主義」、「遂行(業績本位)」ということになる。この特徴は、近代社会の本質をどのように捉えるのかについての、マルクス的な自己利益追求型とかウエーバー的な支配権力型といった把握では理解しえない側面がますますウエイトが高まってくることを、パーソンズは洞察していることに注目すべきであろう。この点を、高山巖氏は、「現代社会において“非典型的”と見做されがちな「プロフェッション」的類型がこんにち著しくその社会的重要性を増しつつあり、現代産業社会

の構造自体が「プロフェッション」的類型の方向にそって再組織化されつつあるという確」こそが、「パーソンズの問題関心の核心」をなしていたと述べている。<sup>39)</sup>

アメリカを先進的とする現代産業社会が、専門職業人が「教育革命」を通じて次に述べる「道具的能動主義」が体得され、社会化されることによって、新しい連帯が生み出されるという楽観主義に、パーソンズは与していたのであった。

### (c) 「道具的能動主義」

では、現代においてますます増加する専門職業人が体得すべき「道具的能動主義」とは、どのようなものであろうか？

パーソンズは、1958年にフランスの『宗教社会学雑誌』に「合衆国における宗教組織の型における変化の若干の傾向」という論文を寄稿した。そのなかで、「アメリカ社会では、大綱において、キリスト教社会の偉大な伝統と一致しているが、しかし基本的な側面においてその初期のキリスト教とは異なる〈制度化されたキリスト教〉の考えを進化させてきた」と示唆する。そして「現代アメリカ社会の諸価値が、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と〈資本主義〉の精神』において、「禁欲的プロテスタンティズム」の倫理と呼んだ諸伝統に、就中、基本的な宗教的ルーツを持っているという事実、そしてこれらの価値がわれわれの国民史の流れのなかで根本的に変化することはなかったという事実」の存在を指摘する。その上で、「生じてしまった莫大な変化は、価値ではなく、その価値が維持され実行される社会の構造の、基本的変化を構成している」と断定するのである。では、その価値体系とは何なのか？ それこそ、「道具的能動主義」の価値である。それは、「個人の私的な欲求を彼が彼の十分なエネルギーを捧げることが期待される客観的〈仕事〉に従属させること、そしてすべての行為を普遍的な判断基準に服従させる」という内容を持ったものである。こうして、「先ずは神の王国を地上に建設するのを助けるこ

とによる、神の栄光への奉仕という観念」という「カルヴィニズム的倫理」に由来するこの〈道具的能動主義〉の価値への持続的関与がアメリカ社会には見られるのであるが、今日では、これに「市民権の、および教育や健康への接近の平等化によって実質的な遂行の本質的な諸条件を普遍化する」ということが付加され、「主に超越論的準拠から主に地上の焦点への移行が、世俗化の局面としてではなく、ウェーバーが強調したように、禁欲的プロテスタンティズムという高度に能動的な宗教的伝統のなかで、生じたことは、特記すべきであろう」<sup>40)</sup>とパーソンズは、主張する。

このような基本的認識を踏まえて、当時流布されたリースマンの『孤独な群集』の内部指向型から他人指向型へのアメリカ国民の社会的性格の変貌という見解に対して、根底的批判を加えたのであった。すなわち、「性格と社会の接点」(The Link Between Character & Society (1961))のなかで、「アメリカの価値システムについてわれわれの提示するもっとも一般的な定式」を、「道具的能動主義」として表現している<sup>41)</sup>

「われわれが用いる〈道具的〉という用語は、〈自己完結(充足)的〉という用語に対置されるものである。社会は、〈それ自体が目標〉であるのではなく、むしろある意味で社会の外部の、あるいは社会を超越する諸目標を達成するための手段として把握されている。文化的遺産に照していうならば、これらの目標は宗教的な用語によって規定されてきたものである。そのもっとも重要な観念は、人間は……自分の属する社会組織をも含めて……神の意志の実現のための道具として存在するというものである」。

山之内靖氏は、このようなパーソンズの「道具的能動主義」の含意をウェーバー理論との関連で以下のように述べている。「パーソンズがいう〈道具的〉とは、ウェーバーが宗教的禁欲における二つの対抗的な型としてとりだしたあの〈神の道具(Werkzeug)〉となる世俗内禁欲と〈神の容器(Gefaess)〉となる神秘主義的禁欲とのうちの前者と直接に連なるものであることが判るであろう。いうまでもなく、神の道具としての世俗の世界の合理化に実践的にかかわって



ゆく市民の姿こそは、ウェーバーのいうプロテスタント的エートスの理念的な姿にほかならない」<sup>42)</sup>

このように、パーソンズは、原理的にはウェーバーのいうプロテスタント的エートス論の系譜の上に、現代のアメリカにおけるより具体的な現れを、以下のように述べている。

「現代アメリカ社会について、例を挙げれば、私は、〈道具的能動主義〉と呼ばれるであろう価値体系を仮定する。それは、物理的・心理的自然および諸他の社会といった、社会にとって外的な経験的状况に対する能動的征服の態度、および主に知識と経済的生産の増大を通して達せられる適応的柔軟性水準の増加を含む。知識および経済的生産は、しかしながら、変化する事態への柔軟な適応の特殊な道具として役立つ。それは、限定的な社会的目標へのコミットメントを避けるが、しかし、目標レベルにおける多元主義と非限定的に一般化された「進歩」へのコミットメントによって特徴づけられる。それは、また価値づけられた業績という先行要件の普遍化にコミットしており、それゆえに、とりわけ市民権・教育・健康の面における機会の相対的平等化とその実現にコミットしている。最後に、それは、組織と権威に対する広義の意味でのプラグマティックな態度を内包している。ここでは組織や権威は、容認された特定の目的にとって必要な場合に受け入れられるが、一般化されたハイアラーキー的優越性の兆候はどんなものであれ排撃される」と<sup>43)</sup>

#### (d) 「制度化された個人主義」

以上のように、パーソンズの近代論は、多くの論者と違って、(1)ただ単に産業革命、民主主義革命だけではなくて、教育革命を成熟した近代のメルクマールとしていること、(2)また近代の諸制度との関連で展開されていること、(3)さらには、「社会的共同体」のレベルでの革命まで暗示しているところに、その射程の深さがあるといえよう。

この点を踏まえて、「制度化された個人主義」を理解するためには、パーソン

ズとプラット (Parsons & Platt) 『アメリカの大学』(1973) においては、特に(2)近代の諸制度との関連で、『アメリカの大学』で以下のように論じられていることに注目しよう。すなわち、先に引用した三つの革命の共通性について、「それらは皆緊張を孕んでいたにもかかわらず、それらは、それらの影響が普及するにつれて、人間的条件の水準を均衡をもって前進させた。最近流行らない用語を使えば、それは進化的意味での〈進歩的〉変化をもたらした。社会と個人との双方にとって、それらは、以前に締めつけていた制約からの自由に、そして以前には不可能な達成への機会に寄与した。これは、制度化された個人主義の枠内で生じた。制度化された個人主義によって意味されるのは、平均的個人とかれが属する集合体の、その両者によってコミットされている価値を実現する能力を結局のところ高めるような人間行為を要素とする組織化の様式である。

個人レベルにおけるこの能力の高まりは、組織ならびに制度的規範の社会・文化的な枠組みレベルにおける能力の高まりと同時に発展したものである。というのは、このような枠組みは、個人的単位および集合的単位が、目標や価値を実現する際の秩序枠を形成するものだからである<sup>44)</sup>と。

このような「制度化された個人主義」の基本的確認の上に、パーソンズは、「脱工業的アメリカにおける宗教：世俗化の問題」(初出は、1974年)において詳しく説明している。パーソンズによれば、「新しい社会は、宗教が私的領域に追いやられることによって世俗的社会になった。地上に神の王国を建設するというもう一つのテーマは、決して重要性を減じたわけではない。この過程の頂点をなすのが、新しいアメリカ国民の創出である。独立すること、〈自由に構想され、すべての人は平等に創られている、という命題に捧げられている〉新しい憲法……まさにこうした事実は、宗教的次元を想起させずにはおかない発展であった」<sup>45)</sup>

そして、「制度化された個人主義のパターンの基調をなすのは、〈自己利害の合理的追求〉というまったく功利主義的な観念ではなく、社会環境における個

人の自己実現というずっと広い観念である。したがって、そこでは、連帯の位相が、少なくとも功利主義の意味における自己・利害と同じくらい顕著な役割を演じている<sup>46)</sup>とする。

さらに、「制度化された個人主義によって意味されるのは、平均的個人とかれが属する集合体の、その両者によってコミットされている価値を実現する能力を結局のところ高めるような人間行為を要素とする組織化の様式である。個人レベルにおけるこの能力の高まりは、組織ならびに制度的規範の社会・文化的な枠組みレベルにおける能力の高まりと同時に発展したものである。というのは、このような枠組みは、個人的単位および集合的単位が、目標や価値を実現する際の秩序枠を形成するものだからである<sup>47)</sup>と。

前項の「道具的能動主義」がウェーバー理論との関連性が強いのに対して、本項の「制度化された個人主義」は、デュルケームが『社会分業論』において功利主義的個人主義とは区別されるもので、社会的分業と個人主義との親和的関連の理論に由来していることに注目すべきであろう。この点について、高山巖氏は、「一面において、個人人格の完成とその尊厳を最大限に重視・強調しつつ、他面、その存立根拠を現代産業社会を特徴づける有機的連帯とそれを支える集合的社会意識の中に求めることによって、デュルケームは、一見矛盾するかと思われる「個人人格の発達」と「個人の社会への依存」という二項を理論的に架橋しようと試みたのであった」と指摘している<sup>48)</sup>

このように、パーソンズの「制度化された個人主義」は、デュルケームのモチーフを継承・発展させたものである。

このようなパーソンズの「制度化された個人主義」論を、ハーバーマスは、「社会統合と社会化の二つの相互に補足的にかみ合うパターン」とであると指摘する。

### 第3節 パーソンのポストモダン社会に対する展望

#### (a) 死後20年後のパーソンズ近代論の評価：グローバルなアメリカナイゼーション

ここで、パーソンズの近代論を彼の死後約20年後の現在の時点に立って、簡単に振り返っておこう。パーソンズは、第2節で要約したような諸々の「進化的普遍素」を具備した「成熟した近代」の典型をアメリカ社会に、見出したのであった。アメリカは、まさに「新しい指導国家」であった。そして、アメリカ以外の諸国も「アメリカ化」(Americanization)するのが、必然的であると考えていた。「アメリカ化」を、宗教改革や民主革命と並んで、「西欧社会全体における逆転不能な変化の過程」<sup>49)</sup>として見ていた。この見地は、『近代諸社会の体系』の第7章「新しい諸副旋律」で主旋律を奏でるアメリカ以外の、ソ連、ヨーロッパ、日本を筆頭とする非西欧社会といった新しい諸副旋律について当時までの現状分析を施していたのであったが、その後の展開は、ほぼパーソンズの予想通りであったと判断することができるのではなかろうか。

その一例として、1964年に発表された「社会における進化的普遍素」において「成熟した近代」の〈進化的普遍素〉としての「民主主義的アソシエーション」の問題を取り上げてみよう。パーソンズは、その決定的機能として「指導者の選択と基本政策の形成への構造的参加を、聴問され影響を行使する機会、選択枝の間で実際の選択をする機会への参加と同様に、提供すること」として、「民主主義的アソシエーションとは基本的に異なっているいかなる制度的形態も、もっとも一般的意味で特に権威と権力を正当化できないで、特殊な人物によるその行使のなかで、そして特殊な拘束的政策決定の形成のなかで、合意を調停する。その社会自体における、そしてその政府システムにおける構造的分化の高い水準で、一般化された正当化は、この溝を適切に埋めることはできない」<sup>50)</sup>としていた。この観点から当時のソ連体制に対して、以下の様な予測をなしていた。「私は、この立場を採用するために、私が、共産主義的全体主義組織

が、おそらく長期的に政治的かつ統合的能力において完全に〈民主主義〉に合致してはいないであろうと主張しなければならないことを、認める。私は、実際に、それ（共産主義）が不安定となることが証明され、選挙民主主義と複数政党制の一般的方向に調整するか、あるいは一般的にはより遅れた、政治的にはより効率の少ない組織形態に〈後退し〉、急速にかさもなくば予想されるとは掛け離れた形で、前進するのに失敗するかするであろうと予測する。この予言の一つの重要な基礎は、共産党が新しい社会のために民衆を教育するというその機能をいたるところで強調してきたということである。長期的に、その正当性は、もしも党の指導権がそれが教育してきた民衆を信頼したくないのを続けているならば、確実に危うくなるであろう。しかしながら、現在の文脈では、民衆を信頼することは、政治的責任の分担することを彼らに保証することである。このことは、結果的に単一の一枚岩の党がそのような責任の独占を消失させなければならない（このことは、この発展が進行するであろう多くの複雑な仕方を分析することではなく、それがもっとも移行しやすい方向ともしてもそれがその方向を採用しなかったならば、もたらずにちがいない帰結を指示するに過ぎないことである）」<sup>51)</sup>と。

現在の時点では、パーソンズの予測は、完全に正しかったことが立証された。ソ連体制は崩壊して、自由主義圏の仲間入りをしたし、中国もパーソンズの予測の分岐のいずれかに向かうことは、間違いのないであろうし、時間の問題に過ぎない。

#### (b) パーソンズのポストモダン社会論

パーソンズは、まさにモダンの社会学者であった。彼の生前からアメリカ社会にも大きな社会変容が見られたし、さらには彼が1979年に死去した後の1980年代には、先進社会は、まさにポストモダニズムの波に蔽われるようになったことは、周知の通りである。それでは、パーソンズは、ポストモダン社会に対してどのような展望を抱いていたのであろうか？

『近代諸社会の体系』の末尾を、パーソンズは、次の様に締めくくっている。

「われわれは、近代的展開が最頂点にのぼりつめるといふようなことは、まだまだ先の話であって……多分、一世紀あるいはそれ以上先になると予想するべきであろう。

〈ポストモダン〉の社会について語ることは、そういう意味で決定的に早計すぎる。決定的な破壊の否定できない可能性を考慮に入れるとしても、われわれの予想は、次世紀あるいはそれ以降の主要な傾向は、にもかかわらず、われわれが〈モダン〉と呼んできた社会類型の完成をめざしてであろうということである<sup>52)</sup>と。

1971年時点でのパーソンズの予想である。しかしながら、ポストモダン社会の到来を全面的に否定的であったわけではない。同書においても、「近代諸社会のより優れた適応能力をわれわれが評価することは、社会発展のポストモダンの局面が、いつの日か、異なる社会的、文化的起源から、そして異なる特徴をもって、出現するかもしれないという可能性を、排除するものではない」と論じている。そして、パーソンズは、「諸社会は文化を制度化するが故に、他の文化との接触による外部からの浸透に晒されている。種の遺伝的組成の閉鎖性が種の交差的不毛性によって強化されているにもかかわらず、ばらばらの文化は、一定の諸条件のもとでは、豊穡に交流することができる」として、生物進化論と対比しながら新しい社会進化論を提唱する。この文脈のなかで、ポストモダン社会の可能性を「近代社会は、たとえば、必ずしもすべてが西歐的でないにせよ、多様な文化的起源の成分を包含しているのである」としている。同書で示唆された論点は、1972年の編著『前近代社会論集』における一般的序論で、以下のように述べている。

「もしもある人々によって既に予示されているように、〈ポストモダン〉社会が到来するとするならば、われわれは、非西歐諸国……すなわち（インドよりもむしろ）中国的〈新ローマ的〉基盤、および仏教と神道からの〈種子〉的要素……が本質的であることが証明されるであろうと示唆したい。

同時に、われわれは、社会文化的進化の東洋指導であれ東洋包摂的であれ新しい局面が、これらの東洋的要素と著しく西欧的起源の遺産との適切な統合となるであろうことを示唆する。われわれは、さらに、この統合のもっとも重要な現在の媒体の一つが、マルクス主義、しかしただ単にレーニンだけではなくて、毛沢東経由の、その大きな修正版におけるマルクス主義であるのではないかと思う。この修正の主要な兆候は、象徴的〈救済者〉がもはや産業プロレタリアートではなくて、一方では農民大衆、他方では〈低開発社会〉であるということである。他の媒体は、とりわけアメリカ的影響によって媒介された西欧的〈自由主義〉である」<sup>53)</sup>と。

すでにヨーロッパにおける近代社会の成立を、土壌社会＝ローマ、苗床社会＝イスラエルやギリシャとして、「価値一般化」を担うキリスト教の出現によって「近代社会」の成立を見たのであったが、ポストモダン社会が成立するとすれば、土壌社会＝中国、苗床社会＝日本、そして新しい「価値一般化」を担うのは、中国のマルクス主義が日本の仏教と神道という〈種子〉によって発酵され、そうして西欧的〈自由主義〉が中国化されることによって醸造されてくるものであると予想している。誠に壮大な将来のポストモダン社会論である。

パーソンズのこのような見通しをどのように評価したらいいのか。パーソンズ死後20年の現実を知っているわれわれとしては、パーソンズの予想の当たらなかったのではないかと考えられる点が無い訳ではない。特に、毛沢東主義の没落がそうである。むしろ、アジアには新しいアメリカ的価値観の浸透を踏まえたアジアの勃興に見られるように「アメリカ化」の趨勢がより強く作用し、他方、西欧と日本など先進諸国では、ハイ・モダニティー化とポストモダン化という一見矛盾した現象が重層的に同時進行しているのではなかろうか。

ハイ・モダニティー化の方は、前項で述べたパーソンズのいわゆる「アメリカ化」がイギリスをはじめヨーロッパでも少しずつ浸透しているし、日本は、まさに戦後50年間の日本的諸制度の改革を迫られて、「荒々しいアメリカ的資本主義化」が急速に現実化してきているのでは、なかろうか？

他方、ポストモダン化について言えば、フランス起源のポスト構造主義に由来するポストモダン論、さらには文化面におけるポストモダニズムのさらなる浸透が見られており、この点は、パーソンズの予想を超えているのではなかろうか。

しかしながら、パーソンズは、ポストモダン社会の到来を1—2世紀先のことと見ていたのであるから、断定的評価を下すには、時期尚早と言ってよいのではなかろうか。

われわれは、世界史の大きなうねりと動向をしっかりと見据え、冷静に検討しなければならないであろう。

#### 注

- (1) 熊坂賢次「パーソンズとモダンのリアリティ」、佐藤慶幸・那須寿編著、『危機と再生の社会理論』、マルジュ社、1993
- (2) たとえば、Roberetson, R. & Turner, B., “Talcott Parsons: Theorist of Modernity”, Sage Publications”, (1991) は、その代表である。
- (3) 小原昌『社会学論叢』, 128, 1997, p. 3
- (4) 熊坂賢次, p. 95, p. 91
- (5) 小原昌, Ibid., P. 13
- (6) Tallcot Parsons, “The Social System”, The Free Press, 1951 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店 (1974) 訳 476 頁 (但し、訳文は一部変更)
- (7) Ibid., P. 535 ; 訳 525 頁
- (8) Ibid., P. 486 ; 訳 481 頁
- (9) 富永健一『行為と社会システムの理論：構造—機能—変動理論をめざして』(1995) 95 頁
- (10) Ibid., 117 頁
- (11) Ibid., 181-2 頁
- (12) Ibid., 198 頁
- (13) Ibid., 226 頁
- (14) Roberetson, R. & Turner, B. (1991), p. 257
- (15) Parsons, T., “Sociological Theory & Modern Society”, The Free Press, 1967 ; p. 176
- (16) Parsons, T., “Societies”. Prentice-Hall, 1966; p. 29; 矢沢修次郎訳『社会類型—進化と比較』至誠堂 (1971) ; 41 頁



- (17) Ibid., 41 頁
- (18) Ibid., 41 頁
- (19) Parsons, T., "Action Theory & The Human Condition", The Free Press, 1978
- (20) Parsons, T., "The System of Modern Societies", Prentice-Hall, 1971, p. 8; 井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂(但し, 訳文は一部変更)(1977); 12 頁
- (21) Ibid., p. 11, 17 頁
- (22) Parsons, T., "Societies", p. 2 『社会類型—進化と比較』 3 頁
- (23) Parsons, T., "Social System & The Evolution of Action Theory", The Free Press, 1977, p. 130; 田野崎昭夫監訳『近代体系と行為理論の展開』誠信書房, 1992, 172 頁(訳文, 一部変更)
- (24) Parsons, T., "Sociological Theory & Modern Society", The Free Press, 1967; p. 491
- (25) Ibid., p. 493
- (26) 田野崎昭夫監訳『社会体系と行為理論の展開』誠信書房, 1992; 132 頁
- (27) Ibid., 135 頁
- (28) Robertson, R. & Turner, B. (1991) pp. 176~177 中久郎・清野正義・遠藤雄三訳『近代性の構造: パーソンズの射程』恒星社厚生閣, 1995; 235 頁(訳文, 一部変更)
- (29) Parsons & Platt, "The American University", Harvard Univ. Press, 1973; p. 1
- (30) パーソンズ, 『近代社会の体系』(1971), p. 154
- (31) Robertson & Turner, (1991) p. 254; 訳 340 頁(訳文, 一部変更)
- (32) 千石好郎編『モダンとポストモダン: 現代社会学からの接近』法律文化社, 1994; 4-5 頁。パーソンズ理論とヘーゲル—マルクス理論の比較は, 一部に推進されているが, さらに本格的になされる必要がある。
- (33) パーソンズ, 『近代社会の体系』, 147 頁
- (34) Ibid., 184 頁
- (35) Ibid., 184-185 頁
- (36) Ibid., 185 頁
- (37) Parsons, T., "Social Structure & Personality", 1964 (武田良三監訳, 『社会構造とパーソナリティ』, 新泉社, 1973) P. 427, 第 12 章。
- (38) Ibid., 431 頁
- (39) 高山巖『現代政治理論における人間像……タルコット・パーソンズ研究序説』法政大学出版局, 1986, 157 頁
- (40) Parsons, T., "Structure & Process in Modern Societies", The Free Press, 1960, p. 311
- (41) 「性格と社会の接点」(The Link Between Character & Society (1961)) Parsons, T. (武

- 田良三監訳, "Social Structure & Personality (『社会構造とパーソナリティー』) 1964", 『新泉社』, 1973, 262頁
- (42) 山之内靖『現代社会の歴史的位相：疎外論の再構成をめざして』, 日本評論社, 1982, 305頁
- (43) 「権威・正当化および政治的行為」, Parsons, T., "Structure & Process in Modern Societies", The Free Press, 1960
- (44) Parsons & Platt 『アメリカの大学』 (1975) p. 1
- (45) 「脱工業的アメリカにおける宗教：世俗化の問題」 p. 309, Parsons, T., "Action Theory & The Human Condition", The Free Press, 1978, p. 309
- (46) Ibid., p. 321
- (47) 「脱工業的アメリカにおける宗教：世俗化の問題」 p. 309, Parsons, T., "Action Theory & The Human Condition", The Free Press, 1978, p. 309
- (48) 高山巖『現代政治理論における人間像……タルコット・パーソンズ研究序説』法政大学出版局, 1986, p. 279
- (49) 『近代諸社会の体系』 197頁
- (50) Parsons, T., "Sociological Theory & Modern Society", The Free Press, 1967; p. 176, p. 40
- (51) Ibid., pp. 518-9
- (52) 『近代社会の体系』 p. 143; 訳 216 (訳文, 一部変更)
- (53) Parsons / Lidz (eds.) "Readings on Premodern Societies", Prentice Hall, 1972, p. 5  
(本稿は, 平成8年度松山大学特別助成の成果の一部である。)